

オーケストラ シンフォニカ 東京

第 41 回

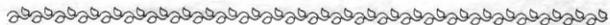
定期演奏会

平成 12 年 4 月 17 日 (月) 午後 7:00 開演

カザルスホール



プログラム



第一部

指揮：山本雅三

- | | |
|----------------|-------------------------|
| ○ 喜歌劇「天国と地獄」序曲 | J. オッフェンバッハ
(高梨芳臣 編) |
| スペイン舞曲第1番 | M. ファリャ
(中野二郎 編) |
| ○ スラブ舞曲第10番 | A. ドヴォルザーク
(中川信良 編) |
| ○ ハンガリー舞曲第6番 | J. ブラームス
(小杉太郎 編) |
| ユーゴスラビアの唄と踊り | B.W. ジーグムント |

第二部

指揮：石黒不二夫

堀 清隆 作品集 (生誕百年記念)

海のセレナータ

F 組曲「初夏に寄す」第2番「行列」

バレエ「陽炎(かげろう)」

第三部

指揮：石黒不二夫

- | | |
|------------------------|------------------------|
| ○ ゴッレンネオーバーチュア(荘厳なる序曲) | H. フンガーラント
(赤城 淳 編) |
| ○ ハイムライゼ(帰郷) | K. ヴェルキイ |
| ○ ヴェルシリア 二調のシンフォニア | M. バッチ |

曲 目 解 説

第 一 部

喜歌劇「天国と地獄」序曲

J. オッフェンバッハ

我国では、カステラのコマーシャルでおなじみの曲です。作曲者のオッフェンバッハ(1819~1880)はドイツで生まれ、主にフランスで活躍し大きな成功を治め、その後のオペレッタの発展に多大な影響を与えました。(オペレッタは小型のオペラという意味で、大衆的な音楽劇として19世紀中頃から20世紀初頭にかけて大変な人気を博し、今日のミュージカルのルーツの一つともなりました)

1858年に発表された「天国と地獄」は、数多いオペレッタの中でも最大のヒット作となりました。原題を「地獄のオルフェウス」と言い、当時の社会風刺を交えてギリシャ神話を茶化した、陽気でにぎやかな内容になっています。オルフェウスと妻のユーリデイスは、それぞれ別の人に思いを寄せていて喧嘩が絶えませんでした。あるとき妻が地獄の神に連れ去られますが、オルフェウスはかえって大喜びする有り様。しかし世間体から、洪々と妻を連れ戻しに出かけます。天国の神を交えたドタバタの後、「地獄を出るまで決して振り向いて妻の顔を見てはいけない」という条件を出されましたが、凄まじい雷光に思わず振り向いてしまったオルフェウス。でもそのおかげでまんまと離婚に成功し、喜び勇んで恋人の元へ向かっていくという滑稽なお話です。この序曲は色々な場面の音楽がメドレー形式で要領よくまとめられた楽しい作品になっています。終わりの方に登場するあの有名なギャロップは劇のフィナーレで天国と地獄の神々が一堂に会して酒宴に興ずる場面です。

スペイン舞曲第1番

M. ファリャ

近代スペイン民族楽派の代表的作曲家であるファリャ(1878~1946)の初めての本格的なオペラ「はかなき人生」(1905年作)からの一曲です。1900年頃の古都グラナダを舞台に、貧しいジプシー娘が恋したスペイン青年の心変わりに嘆き、彼の婚礼の宴で自らの命を絶つという、はかなき恋が描かれています。この第1番は第2幕のはじめに演奏され、旋律もリズムもいかにもスペイン的な情熱にあふれていると同時に、非常に洗練された雰囲気をもたえ単独でもしばしば演奏される人気の高い曲となっています。

スラブ舞曲第10番

A. ドヴォルザーク

近代チェコ音楽の第一人者ドヴォルザーク(1841~1904)の出世作「スラブ舞曲」は、ブラームスの「ハンガリー舞曲」の出版商だったジムロックがその成功を受け、それに相当するような曲集をドヴォルザークに熱望し作られました。ドヴォルザークは尊敬するブラームスにあやかる気持ちもありわずか2ヵ月たらずで8曲のピアノ2重奏曲を1878年に完成させました。第1集は出版と同時に人気を博し、オケ用編曲が出来るるとたちまち各地のオーケストラが競ってレパートリーに加えられました。第10番は86年に出た第2集の2曲目で、ほのかな憂愁と感傷のただよう甘美な主旋律を持ち、全曲中もっとも有名な曲となっています。

ハンガリー舞曲第6番

J. ブラームス

ドイツの作曲家ブラームス(1833~1897)は20歳になったとき(1853年)、ハンガリー系のヴァイオリン奏者レマーニーと演奏旅行に出かけ、その際多くのハンガリージプシー音楽を彼から聞かされ興味を持ちました。その時のメモを参考にピアノ連弾用に編曲し1869年に出版され大評判になったのが、「ハンガリー舞曲集」です。レマーニーは自分が教えた音楽を使っているから著作権侵害として訴えましたが、ブラームスは編曲として出版していたため勝訴しました。急緩の速度変化とシンコペーションのリズムが特徴のジプシー音楽ですが、「ジプシー」の呼び方には偏見があったため、当時曲名には「ハンガリー」が使用される傾向がありました。第5番とこの6番がよく知られています。

ユーゴスラビアの歌と踊り

B.W. ジーグムント

我がクラブが「オーケストラ シンフォニカ タケイ」の名称で活動していた昭和50年の定期演奏会で演奏した曲です。当時の杉田村雄理事長の曲目解説を転載いたします。

此曲はベルリン・ツップムジーク'74音楽祭に招かれて渡欧した時レヒベルクハウゼン・マンドリンクラブから貰った曲である。所謂ツップ奏法の曲であるベルリン音楽祭プロの作曲家紹介欄では名前だけ紹介されて居り、不明、恐らく現代の作曲家であろう。レヒのマンドリンクラブが歓迎レセプションに演奏した曲でリズムのハッキリした激しい曲である。曲中前半に7/8拍子という2/3拍子が交った、リズムが出て来て後半、曲はアンダンテ、アレグロ、ヴィヴァと激しくなりプレスト、ストリンジェンドと急迫して曲は突如終る。

第二部 堀 清 隆 作品集

堀 清隆(1900~1986)は当楽団の前身であるオルケストラ・シンフォニカ・タケイ(旧OST)において、武井守成のもとで指揮者、ギタローネ等の奏者として活躍する傍ら20曲余を作曲してOSTに新風を吹き込みました。今年が生誕百年に当たりますので、記念して演奏いたします。この3曲ともマンドラ・テノールのほかマンドラ・コントラルトを加えてオーケストレーションしておりますので本日は原譜に忠実に演奏します。

マンドラ・コントラルトはヴァイオリン系のヴィオラと同じ音程で米国ではじめて使われ、その後欧州でも使用されるようになりましたが、現在ではあまり演奏に加えられておりません。

海のセレナータ

昭和3年(1928)前後は作者にとって多忙であり、作曲活動も最も盛んな時期で、大作も次々と創作し、自らOST(タケイ)を指揮して発表していました。その中の1曲がこの作品で、傑作であります。

穏やかな波、そして、うねりの大きな波・荒波、流れ変わる空の雲、また再び戻る静かな海の情景が6/8拍子のバルカローレで見事に歌い上げられております。

組曲「初夏に寄す」第2番「行列」

生まれ故郷の京都をモチーフとした組曲「初夏に寄す」の第2番ですが、2/4拍子のリズムと日本調の旋律が好まれて、たびたび単独で演奏されております。毎年5月15日に催される賀茂神社の祭祀、賀茂祭、別名葵(あおい)祭の行列の情景を描いた曲です。行列は公家や女官を乗せた牛車(ぎっしゃ)を中心に進む平安時代の風俗絵巻の優雅華麗さを古式ゆかしく再現しております。

バレエ「陽炎(かげろう)」

昭和2年(1927)にOST(タケイ)主催の第1回作曲コンクールにおいて入選した曲で、同時に鈴木静一の「空」、井上繁隆の「セレナード」も共に入選しております。大正13年(1924)秋に作曲し未完成のままにしてあったのを、このコンクールの前に完成したものと伝えられております。

2/4拍子の速い曲で、スケルツォと指示されており戯れ気味の舞踊曲です。情熱的で、エキゾチックな作風から多くの方に好まれ、しばしば演奏されております。

第三部

ゾレンネ オーバーチュア(荘厳なる序曲)

H.フンガーラント

作者(1896~1970)はドイツ生まれの作曲家であったが、カッセル市でマンドリンを教え、1919年にはカッセルマンドリンオーケストラを創設して活動しておりました。作品には「シンフォニエッタ イ長調」「ロマンス エニ長調」などがあります。

この曲は作品番号第8番で新進気鋭の初期の作品で、古典に潤いと新しい味を付け加えた特色を持っています。長い序奏のあとにアレグロの主題が出て、マンドリンのカデンツァを経て入るアダージョはこの曲の中で最も荘厳な部分です。随所にテンポの変化があります。マンドリンオーケストラに対するドイツ人の理想としての荘重且つ威厳な感情の表現がよく表現されております。

ハイムライゼ(帰郷)

K.ヴェルキイ

作者(1904~1983)はドイツ生まれの作曲家で104曲の作品と40余曲の編曲、マンドリン教則本を出しております。作品の多くは管楽器の編成があり、中でも6つの序曲は作者の代表作と言われております。また、ドイツにおけるマンドリンの指導者だけではなく、1962年から1966年迄ベルリン市立音楽学校で青少年の指導を行う等音楽家として幅広い活動を行っております。

この曲は作品17番、28才(1932年)時の作品で、原曲は木管楽器を加えたオーケストラ曲です。故郷を離れ郷里に帰る心情を表しており、曲半ばのアダジオマエストロのメロディーで、ゆったり美しく、近づく故郷を想い、次第に感情が高揚し、続くアレグロでやっと故郷に着いた喜びを感じさせます。

ヴェルシリア 二調のシンフォニア

M.バッチ

作者(1873~1940?)はイタリアのフィレンツェの生まれでマンドリン、ギター教則本、オペラ教育用の本等を出版していますが作曲を行う傍らフィレンツェのマンドリン合奏団の指揮もしており、後年ローマの文化連盟の会長の要職も務めました。代表的な曲は「ヴェルシリア」と「マリネッタ」の2曲で、作風はマンドリンアンサンブルに純イタリア風の、または古いフランス風の美しい旋律と古典的な表現が特長です。

この曲は1925年頃の作でフィレンツェのムニエル合奏団に贈られたもので、OSTでは昭和5年(1930)と同46年(1971)に演奏しております。2/4拍子で、アンダンテで始まる序奏のあとアレグロの中間部では16分音符でマンドリンの美しさを表現し、その後二長調に変調し再び二短調で終わっています。

父とマンドリン

中澤啓子

父堀清隆は1900年京都で生まれ、今年が生誕百年になります。1922年から1925年にかけて父は同志社大学に在学致し、同大学のマンドリンクラブでマンドリンを学びました。

1997年の秋にマンドリンクラブ80周年の記念誌の発行の記念パーティにお招きいただきました折り、同志社大のマンドリン合奏団が、1923年1月に武井守成様主宰のマンドリン合奏団のコンクール第1回に課題曲ブランコ(ロマンツァ)、自由曲マネンテ「マンバアの平原にて」を演奏して優勝致し、その時頂いた銀の優勝カップを拝見致しました。それは少しこわれた桐箱の中から燦と輝く美しい彫刻されたカップで当時を偲び感銘を受けました。そしてそのカップを前にして70数年前に演奏されました曲を同志社大のマンドリンクラブの現役の方々が演奏して下さいました。80周年誌にはその時の指揮をされた方が優勝の様子を詳しく記録して下さいました。

当時のメンバーは18名で菅原明朗先生の御指導の元、毎晩おそく迄練習をしてコンクールに望んだ様子が記されております。

父が同志社大学に在学中、武井様はその頃京都御所での宮中行事が多くあり、所用でよく御出張で京都に来られておりました。その時には何時も御用の合間をみて御所のすぐ近くにありますが同志社大学にマンドリンクラブの練習をのぞかれ、又夜には父の父親が御所に奉職しており御所内の官舎に住んでおりましたため、父の家に集まっておりますマンドリンクラブの学生さん達と夜更けるのも忘れて、にぎやかにお話が続いていたとの事でございます。武井様御自身もラコート製の折りたたみ式のテルツギターを持って来られ弾き乍ら親しくお話されましたり、色々御指導して下さいましたとの事でございます。

武井様は若い人達と膝をまじえて惜しみなく技法を伝授されエネルギッシュな方でいられました。

父は同志社大学を卒業いたしますと同時に武井様に宮内省に御推挙いただき上京致し、OSTに入れていただきギタローネを担当致しました。

武井様は1910年外国語大学伊太利語科に入学され、在学中にイタリアに留学され、そこで本格的なマンドリンアンサンブルを修得されました。帰国後日本に於いて、マンドリン合奏の組織づくりに努力され、同志社大を始め東京周辺の各大学にマンドリンクラブが誕生し、武井様の熱意によってマンドリン音楽が隆盛になりました。

1916年には武井様は御身内の方や奥様のピアノも加えられて8名で御自身の合奏団をつくれ、これがOSTのもとになりました。又武井様は若い方々を熱心に育成されコンクールを主宰されました。

その第1回のコンクールで父達のグループが優勝致し、その時の優勝カップを拝見致し武井様がどんなに若い方々の育成に力を入れられました事を思い感動致しました。

1927年に「陽炎」がコンクールで作曲部門の2等に入选(1等該当なし)致しました。その2年後の1929年の「行列」は京都の葵祭の様子を描いたものでございます。父は京都の生まれ、育ちましたので、京都のお祭りが大好きでございました。何時も子供達をうきうきした気分でお祭り見物に連れて行きました。「海のセレナード」は同志社大学在学中の作品で父の母方の家(お寺)琵琶湖畔にございまして現存しております。そこに子供の頃からよく行っておりましたようでございます。京都の街中では海を見る事が出来ませんので海には憧れがあったのだと思います。対岸も見えない、広い湖にさざ波のたつ風景を眺めて、海の向こうの遠い外国のことを思いながら作曲したと申しておりました。

父は大変無口な人でございましたので、マンドリン音楽につきまして言葉も文章も残しておりませんが、父の曲を聞いておると若き日にマンドリンの和音の美しさに出会い、驚き、魅了されて、メンバーの方々と力を合わせてその音色の完成に情熱を傾けたのでございましょう。その頃の生々とした父が私達に今でも語りかけております。

父は武井様の元でマンドリン音楽と作曲を学び、長く御指導たまわり、武井様を親のように御尊敬申し上げておりました。父の曲は同志社大在学中の作曲と武井様のもとで学びました頃とは作風が大きく変わっております。そして武井様がお亡くなりになられました後、父は作曲をやめております。

1986年3月父は85才で世界致しました。父は晩年にもよく指先を動かしリズムをとっておりました。きっと心の中では美しいマンドリン曲を奏でていたのでございましょう。大変幸せな人生を送った人でございました。

OSTのマンドリン音楽これからも武井様の築かれました礎石の上に美しいマンドリンの音を積み上げて行かれますようますます御発展をお祈り申し上げます。

最後になりましたが此度父の生誕百年を記念して父の作品を演奏していただきまして厚く御礼申し上げます。

指揮者：*石黒不二夫 *山本雅三

コンサートマスター：*本間輝樹

第一マンドリン：*本間輝樹 田島明子 諸井美津江 岩崎早苗
秋元興光 新居裕久 城戸かほる 村上二郎

第二マンドリン：*後藤俊明 坂井美佐子 嶋直樹 平賀理英子
*藤田正美 山崎悦子 高梨一弘 *岡田茂

マンドラ コンタルト：*岩片順子 滝田ふさ子

マンドラ テノール：*岩片順子 田中倭文子 滝田ふさ子 渡辺清
玉木理恵子 佐々木興治 深野靖夫

ギター：宮本紀子 平田陽一 *山本雅三 戸次脩
高橋貴久子 高橋悠介 城所俊雄 門田雄二
沢田行雄

リュート モデルノ：*宮本皓永

マンドチェロ：宮崎泰行 田村美恵子

マンドローネ：*家城孝治 宮沢栄作

コントラバス：佐藤正 久保田聡

フルート：•比護いづみ

クラリネット：•佐藤路世

打楽器：•秋葉久美子 •加藤直美 •伊藤優

{ * _____ 幹事 }
• _____ 賛助出演 }

オーケストラ シンフォニカ 東京 (OST)

連絡先：〒239-0844 横須賀市岩戸4-14-16 石黒不二夫

TEL 0468-49-0848